eye

夢を語る集落 新潟・池谷から

限界集落へ若者Iターン

人口の50％以上が65歳以上の高齢者になり、社会的共同生活の維持が困難になった「限界集落」。06年の国土交通省の調査によると、全国に7878ある限界集落のうち、2643カ所が消滅する恐れがあるという。しかし、若者のIターンが続き、限界集落の状態を脱した村がある。7世帯17人が暮らす新潟県十日町市の池谷集落だ。村を存続させようと、未来を語る人たちの夢を追う。

写真・文 森田剛史

3㍍を超える積雪に覆われる池谷の冬。「ザクッ、ザクッ」。スーツケースを手に雪道を踏みしめ、一人の若い女性が集落にたどり着いた。立教大4年の坂下可奈子さん(23)。村で「就農」するため、東京での下宿生活に別れを告げて来た。

初めて池谷を訪れたのは大学3年の夏。NPOが主催する農作業のイベントに参加し、田んぼの雑草を刈った。集会場で開かれた交流会で、村の人が力強く歌う祝い歌「天神囃子(はやし)」を聞き、なぜか涙があふれた。その訳が知りたくて、池谷に通うようになった。

「いつか村を法人化して、持ってる田んぼも機材も預けて、若者の農業を応援したい」。未来の夢を語る村の人たちに、後継者不足に悩み「元気がなくて廃れた」限界集落のイメージが覆された。ある時、同姓が多い村で「津倉」の屋号で呼ばれる曽根武さん(74)が連れて行ってくれた山で、等間隔に並ぶイチョウの木を目にした。「もし若い人が村に来ても米だけでは食えん。ギンナンが取れたら少しは足しになる」と集落で購入したものだった。「いつ来るか帰るか分からない若者のために準備しているなんて」。涙の訳は「困難に立ち向かう底無しの強さに触れたからだ」と分かった。

「彼らのように生きたい」。内定していた映像製作会社への就職を辞退し、池谷への移住を決めた。触ったこともない牛の世話から新生活が始まった。

繁殖用雌牛を日光浴させるため、農業研修生の籾山旭太（もみやま・あきた）さん（右）から指導を受ける坂下可奈子さん（中央）。おぼつかない誘導ぶりを村のお母さんたちが心配そうに見守る＝2月21日

スーツケースを手に、入居する旧分校前の雪道を上る坂下さん＝2月20日

雪に覆われた2階建て民家の屋根に上って、地元住民と一緒に雪下ろしする大勢のボランティアら＝2月6日

雪かきのイベントに合わせて行われた小正月の行事「さいの神」で、燃え上がる炎をボランティアらと見つめる村のお母さん＝2月6日

ボランティアらとの交流会で食事の準備をしながら笑顔を見せる曽根イミ子さん（右）＝2月5日

限界集落からの脱却

「特別豪雪地帯」の池谷集落は、昭和30年代の最盛期には37世帯170人以上の住民が暮らしたが、農林業の衰退に加え04年の中越地震の被害により、人口が6世帯13人に減少。その大半が70歳を超え、家屋や農地が崩壊した池谷では、村を畳むことを考えたという。隣接する入山集落は89年、過疎化で既に消滅していた。

しかし、震災直後から現地で活動したNPO「JEN」が、稲作や除雪の復興支援をイベント化し継続したことで、定期的にボランティアとして訪れる都市部の住民と交流が生まれた。これまでに池谷を訪れたボランティアは延べ1000人以上になる。住民らも受け入れ組織として「十日町市地域おこし実行委員会」を発足。昨年末、池谷は「JEN」からの自立式を行った。農村政策論が専門の小田切徳美・明治大農学部教授は「全国的に有名な資源がない池谷のような普通の中山間地で、若いIターン者により高齢化率が下がることは珍しい」と評価する。